

平成28年度 「大正小学校 台東区授業改善推進プラン」

○調査の概要「台東区総合学力調査、全国学力・学習状況調査」

調査の対象 第4学年、第5学年、第6学年

実施日 平成28年4月18日・19日

実施科目 第4学年 国語、算数

第5学年 国語、社会、算数、理科

第6学年 国語 (AB)、社会、算数 (AB)、理科

第4学年 国語

1 結果の分析

(1) 結果の概要

○全体的な状況の説明

◇「話す聞く能力」は 5.8pt、「読む能力」は 3.6pt、全国平均正答率より高い数値となっている。しかし、「書く能力」は 10.6pt、「言語についての知識・理解・技能」は 2.0pt、全国平均正答率を下回っている。

◇正答率度数分布によると正答率が60%に満たない児童が22%いる。習熟度に応じた個別の学習支援が必要である。

(2) 結果から明らかになった課題

分類	区分	平均正答率 (%)		
		本校	区	全国
評価の観点	話す聞く能力	84.1	80.2	78.3
	書く能力	56.1	64.6	66.7
	読む能力	73.0	73.5	69.4
	言語についての知識・理解・技能	71.9	75.0	73.9

個別の状況 (課題)	解決すべき課題
<p>○書く能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「作文」の設問では、15.7pt 全国平均を下回っている。特に、指定された長さで文書を書くこと、書こうとすることの中心を明確にして書くことに課題がある。 <p>○言語についての知識・理解・技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「文の構成」の設問では主語・述語の理解で0.8pt 全国平均を下回っている。また、「国語辞典の使い方の理解」の設問では5.5pt 全国平均を下回っている。 ・「漢字の読み」に関する設問で、全国平均を2.4pt、「漢字の書き」に関する設問で、全国平均を3.3pt 下回っている。前学年で学習した漢字の読み・書きが十分ではない。 	<p>→書く活動の経験が少なく、各自で推敲する経験も不足している。また、無回答児童も多く、文章を書くことに苦手意識のある児童が多いことが課題である。</p> <p>→主語と述語との関係の理解、「だれが」「いつ」「どこで」等の文の構成について理解が十分でない。</p> <p>→国語辞典の活用の経験が不足している。</p> <p>→学習した漢字や言葉を、国語だけでなく日常的に繰り返し使用し、覚えることに課題がある。</p>

2 改善策

(1) 具体的な改善策

<p>○書く能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常的な日記指導を継続して行う。その際、短い文章の中でも主語述語の関係や文章構成・段落構成を意識するように指導する。また、必ず文章を読み返し、間違いを正す習慣を身に付けさせる。文章を書くことに苦手意識のある児童に対しては、書きやすいテーマ・字数から始め、徐々に字数を増やしていく。フォローアップシートを活用し、問いに合った文章が書けるよう継続して指導する。
<p>○言語についての知識・理解・技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語辞典を常に手元に置き、進んで活用できる環境を整える。また、国語辞典の活用を通して、使い方の理解を深める。 ・授業、朝自習、家庭学習の時間を通して、同じ漢字の読み書きの練習を最低3回は繰り返すようにする。また、週に1度は、言語についての小テストを行い学習した漢字の定着を図る。更に、国語以外の学習でも辞書を使用し、分からない言葉を調べ、確認する習慣を身に付けさせる。

(2) 改善策 (手だて) に対する検証

○教科書の単元末にある基本的な練習問題やフォローアップシート・東京ベーシックドリルにより、正答率が80%を指標として確認する。

○書く能力については、単元末ワークテストの際、設題に合った文章を書くことができているか作文問題を出し、チェックを行う。

○理解不十分な児童に対しては、放課後等に個別指導を行い、誤答に対する指導を繰り返す。

第4学年 算数

1 結果の分析

(1) 結果の概要

分類	区分	平均正答率 (%)		
		本校	区	全国
評価の観点	算数への関心・意欲・態度	73.0	68.8	67.6
	数学的な考え方	64.5	60.7	59.2
	数量や図形についての技能	80.7	78.7	78.0
	数量や図形についての知識・理解	81.8	79.0	78.2

○全体的な状況の説明

- ◇観点別正答率では全ての観点で全国平均を上回っている。特に「数学的な考え方」の平均正答率は区平均を3.8pt、目標値を6.4pt上回った。3年次からの習熟度別少人数指導の実施及び習熟度に応じた課題解決学習の積み重ねの成果と考えられる。
- ◇正答率度数分布によると正答率が60%に満たない児童が全体の8%いる。習熟度別の学習を行ってきたが、個別の学習支援にさらに力を入れていく必要がある。

(2) 結果から明らかになった課題

個別の状況 (課題)	解決すべき課題
<p>○数と計算</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乗法では、かけられる数が1位数の正答率が83.8%、かけられる数が2位数の正答率が74%とかけられる数が1位数のときより9.8pt下回っている。 ・乗法の計算問題では、正答率が74%あるが、乗法を用いて答えを求め、説明する問題(記述)では、正答率が37.8%と低くなっている。 ・「数の相対的な大きさについての理解」の設問の正答率は54.1%で全国平均に比べ、14.9pt下回っている。 <p>○数量関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・□を使った乗法の式に合った文章問題を選ぶ設問の正答率は45.9%で他の設問に比べて低く、目標値を9.1pt下回っている。 	<p>→乗法でかける数の位数が多くなると、正確に答えを求めることができない児童がいる。</p> <p>→計算を活用して、答えを導き、記述で説明する問題には慣れておらず、自分の考えを表現できない。また、題意の把握が不十分である。</p> <p>→数を表すことはできているが、数の比較の理解が不十分である。</p> <p>→何を□として表すのか、また乗法の立式に対する理解が不十分である。</p>



2 改善策

(1) 具体的な改善策

<p>○数と計算</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理解の十分でない児童へは、習熟度別少人数指導において、少人数加配教員及び学力向上推進ティーチャーにより個別の指導を徹底する。また、教科書の問題以外にもフォローアップシート、東京ベーシックドリル等を繰り返し活用する。 ・課題解決の場面で、自分の考えをノートに書いたり、児童同士で話し合ったり、みんなの前で発表したりする機会を定期的に設け、自分の考えを表現する力を育てる。
<p>○数量関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章問題から立式する場合、大事な数値、言葉に着目し、テープ図や線分図に表し、数量関係を視覚化することで、確かな問題把握と演算決定の力を育てる。また、線分図→言葉の式→式と段階を踏むことで、数値や□が何であるか明確にさせる。また、自分で線分図や言葉の式を書き問題解決できるよう繰り返し指導する。 ・理解の十分でない児童へは、少人数加配教員、学力向上推進ティーチャーと連携して、朝学習や休み時間にフォローアップシート、東京ベーシックドリルを活用した補足的な指導を繰り返し行う。

(2) 改善策(手だて)に対する検証

- 教科書の単元末にある練習問題や確認テストで、正答率80%を指標として確認する。
- 東京ベーシックドリルを学年末までに、正答率80%を指標として確認する。

第5学年 国語

1 結果の分析

(1) 結果の概要

○全体的な状況の説明

◇「話す・聞く能力」は2.8pt、「読む能力」は3.5pt、全国の平均正答率を上回っている。

◇「国語への関心・意欲・態度」の平均正答率も、全国を1.3pt上回っている。

◇「言語についての知識・理解・技能」の平均正答率は全国を11.9pt下回っていて、「書く能力」は1.4pt下回っている。本学年児童の課題となる領域である。

◇正答率度数分布によると、正答率が60%に満たない児童が29%いる。個別支援による補充的指導が必要である。

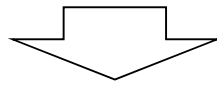
◇昨年度と比べると、「書く能力」「言語についての知識・理解・技能」の正答率が落ちている。昨年度の改善策が有効でなかったか、十分に手立てとして機能していなかったかを検証する必要がある。

分類	区分	平均正答率 (%)		
		本校	区	全国
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	67.9	66.4	66.6
	話す聞く能力	78.2	76.6	75.4
	書く能力	54.7	54.0	56.1
	読む能力	74.4	73.6	70.9
	言語についての知識・理解・技能	63.2	74.0	75.1

(2) 結果から明らかになった課題

個別の状況 (課題)	解決すべき課題
<ul style="list-style-type: none"> 第4学年配当漢字を読んだり書いたりすることが、十分には定着していない。 指定された長さで文章を書くことや2段落構成で文章を書くこと、目的や必要に応じて文章の具体的な内容を書くことに課題がある。 	→語彙、文法、技能など言語活動に要する知識 (言語知識) →自分の考えや主張を分かりやすく正確に伝える力 (表現力)

2 改善策



(1) 具体的な改善策

<p>○国語への関心・意欲・態度</p> <ul style="list-style-type: none"> 読書の習慣化を目指し、学校でも家庭でも、常に1冊は身近に本を置かせておく状況をつくる。朝読書や給食準備時間を活用した読書、家庭学習での毎日読書に取り組みせ、読書カードを使用しながら1年間で1万ページの読書量を目指させる。
<p>○話す・聞く能力</p> <ul style="list-style-type: none"> 正確に音読する力をつけるために、毎日家庭学習で、音読教材へ取り組みせるとともに、週に1回音読の成果を発揮する時間を設定し、練習への意欲を継続させる。また、基本的な話法を日常的に指導し、順序よく話す練習を繰り返し行い、自信をもって話せるようにする。 教師の指示や説明が手本となるよう分かりやすい話し方を徹底する。また、児童の状況に応じて、意図的に指示や説明の量を増やし聞き取る力を高める。その際、話の要点を意識させキーワードでメモをとらせるようにする。 表現活動の際、自分の立場を明確にさせ、事実と感想や意見の区別をし、概論や結論が伝わる話し方を意識させるとともに、それらをメモして発表に生かす方法を指導する。聞き手側は、自分の意見と比べて考えをまとめられるように、上記メモの観点の活用の仕方を指導する。
<p>○書く能力</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科書の作文教材では、作文メモをもとにした構成を考え、作文を書くためのステップを確実に丁寧に進める。
<p>○言葉についての知識・理解・技能</p> <ul style="list-style-type: none"> 漢字ドリルと漢字練習帳の2冊を用意し、授業中に漢字の指導をした上で、毎日家庭学習で練習させる。 漢字小テストを学期に10回程度定期的に行い、まちがい直しを最後まで取り組みせ、定着率を上げる。 日常の日記指導で、習った漢字は使う習慣付けを行う。 理解が不十分な児童に対しては、休み時間などに個別指導を行い、誤答への指導を丁寧にを行う。特に漢字や言葉のまちがいに対しては、丁寧に見取り、確実に直させる。

(2) 改善策（手だて）に対する検証

- 発表メモ及び聞き取りメモから、各自の構成の工夫や正確な聞き取りを検証する。
- 学期途中と学期終わりの漢字50問テストの正答率を80%に設定し、漢字の定着率を検証する。
- 学年末に東京ベーシックドリルを活用し、正答率を80%に設定し、学習の定着率を検証する。

第5学年 算 数

1 結果の分析

(1) 結果の概要

○全体的な状況の説明

◇「数学的な考え方」の平均正答率は、全国の平均正答率並みである。

◇「数量や図形についての技能」は3.5pt、「数量や図形についての知識・理解」は3.3pt、全国の平均正答率を大きく下回っている。「算数への関心・意欲・態度」が3.7pt低いことも、要因として影響していると考えられる。

◇正答率度数分布によると、正答率が60%に満たない児童が27%いる。習熟度に応じた個別の学習支援が必要である。

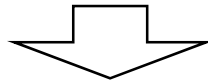
◇昨年度の調査と比べると、どの観点でも正答率が下がっている。特に「知識・理解」での下がり方が大きい。

分類	区分	平均正答率 (%)		
		本校	区	全国
評価の観点	算数への関心・意欲・態度	55.5	54.8	59.2
	数学的な考え方	60.9	60.6	61.3
	数量や図形についての技能	68.3	70.1	71.8
	数量や図形についての知識・理解	61.4	62.5	64.7

(2) 結果から明らかになった課題

個別の状況 (課題)	解決すべき課題
<p>○数と計算</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「わり算」「分数」「億と兆・がい数の表し方」の領域で課題がみられた。 <p>○量と測定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「角の大きさ」「面積」の領域で、課題がみられた。 <p>○図形</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いろいろな形」の領域で、課題がみられた。 <p>○数量関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「計算のきまり・変わり方調べ」の領域で、課題が見られた。 	<p>→「3位数÷2位数=2位数(余りあり)の計算」「倍とわり算の文章問題を表した図の理解」「帯分数÷帯分数=帯分数(繰り上がりあり)の同分母分数の計算」「命数法(漢数字)で書かれた数を記数法(数字)で表す」「切り上げて見積もることの意味を理解し、数が足りるわけを説明」といった設問で定着が不十分である。</p> <p>→「分度器の中に示された角の大きさの目盛りを読み取る」「長方形の面積を求める」「身近にあるものの面積を推察する」といった設問で定着が不十分である。</p> <p>→「四角形の対角線の性質の理解」「平行四辺形の作図」といった設問で定着が不十分である。</p> <p>→「分配法則の理解」といった設問で定着が不十分である。</p>

2 改善策



(1) 具体的な改善策

<p>○算数への関心・意欲、理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器を活用することによって、興味関心を高めるとともに、理解を深めさせる。
<p>○数学的な考え方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題解決型の授業で、自らの考えをもち、二人組やグループで話し合う学習活動を毎時間取り入れる。 ・文章題などの思考力・判断力を強化できるように、算数ドリルを2冊用意して、1冊は授業中に、もう1冊は朝学習や家庭学習で毎日取り組ませ、学習内容の定着を図る。
<p>○技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計算などの技能面と、文章題などの思考力・判断力を強化できるように、算数ドリルを2冊用意して、1冊は授業中に、もう1冊は朝学習や家庭学習で毎日取り組ませ、学習内容の定着を図る。 ・「量と測定」の単元では、身近な物の長さや重さについて見当をつけ、正確な測定ができるように、具体的な操作活動を増やし、個別にていねいに確認をする。また具体物を用いながら、実感的な理解を通して数量感覚を養い、抽象的な概念形成につなげていく。特に作図や測定については、教育機器を活用し、図形を正しい手順で正確に作図をして問題を解けるようにする。
<p>○知識・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元毎にレディネステストを行い、既習事項の学習内容を振り返らせるとともに、定着の度合いを把握することによって習熟度別のクラス分けを行う。 ・習熟度別少人数指導を丁寧に行うことによって、確実な基礎学力の定着とともに、発展的な学習を行う。 ・実感的に理解できるように、視覚教材を用意したり、作業的な活動と取り入れたりといった、教材の工夫をする。 ・知識・理解の定着のために、毎日の家庭学習でその日に解いた問題をもう一度復習させる。また、コース別の学習状況に合わせて、巻末の復習問題や発展問題にも取り組ませる。

- ・ 下位の児童に対する個別指導を充実させる指導体制を整える。理解が不十分な児童に対しては、少人数加配教員や学力向上推進ティーチャーが個別に付き、必要に応じて休み時間や放課後も使って理解できるまで支援を行う。

(2) 改善策（手だて）に対する検証

- 学期毎に、教科書の単元末にある基本的な練習問題や確認テストを行い、正答率 80% を指標として検証をする。
- 学年末に、東京ベーシックドリルで学習内容の定着を確認し、平均正答率を 70.7% から 85% まで上げる。

第5学年 社会

1 結果の分析

(1) 結果の概要

○全体的な状況の説明

◇「社会への関心・意欲・態度」「社会的な思考・判断・表現」の正答率は、全国の平均正答率並みである。

◇「観察・資料活用の技能」の正答率は、全国の平均正答率を 4.6pt 上回っている。

◇「社会的な事象についての知識・理解」は、全国の平均正答率を 2.5pt 下回っている。課題となる観点であるといえる。

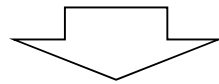
◇正答率度数分布によると、正答率が 60%に満たない児童が 45%いる。正答率の広がり大きい教科であるといえるので、学習の定着を図るための手立てが必要となる。

(2) 結果から明らかになった課題

分類	区分	平均正答率 (%)		
		本校	区	全国
評価の観点	社会的な事象への関心・意欲・態度	55.8	55.8	55.3
	社会的な思考・判断・表現	55.8	55.8	55.3
	観察・資料活用の技能	57.7	53.4	53.1
	社会的な事象についての知識・理解	61.5	64.6	64.0

個別の状況 (課題)	解決すべき課題
○「ごみのしよりと利用」の「生活環境を守る活動」についての学習領域で課題がみられた。	→「リサイクルについて理解している」知識・理解を問う設問、「リユースについて考えることができる」思考・判断を問う設問の定着が十分でない。
○「県の様子」「地図の見方」「県の様子」についての学習領域で課題がみられた。	→「都道府県内の特色ある地域として、伝統的な工業のさかんな地域の特色を理解している」「八方位について理解している」知識・理解を問う設問、「土地の断面図を読み取ることができる」技能を問う設問、「都道府県の産業や、国内の他地域や外国とのかかわりについて、資料を読み取って考え、表現することができる」思考・判断・表現を問う設問の定着が十分でない。

2 改善策



(1) 具体的な改善策

○関心・意欲 ・さまざまな関連資料を教室に掲示することにより、関心・意欲を高めながら、日常生活と学習事項とのつながりを感じることができるようになる。 ・見学したり実物を見たりする体験的な学習を行うことで、より関心高めながら、実感的に学習内容を定着させられるようにする。
○思考・判断・表現 ・単元のねらいに合わせて指導事項を絞り、手立てとしてより有効な教材を用意する。 ・課題解決に向けて、各種資料から根拠を明確にした個々の考えをもたせ、交流する学習場面の設定を増やす。 ・統計資料をもとに、気付いたことや分かったことを学級全体で検討し合う学習場面を、毎時間設定する。 ・個々の思考力を高めるために、学習事項に対する自分なりの見方や考え方を毎時間ノートに記録させる。 ・新聞やノートに自分の考えをまとめる際には、資料集や地図帳から必要な資料を選択させ、その根拠や解釈を明確にしながらまとめさせる。
○技能 ・教科書や資料集にある資料を読み取る視点を明確にし、グラフや表、写真等から大事なことを読み取り考えられるよう繰り返し指導をする。 ・教科書や社会科資料集、図書資料やインターネットの検索機能を利用して収集した資料を活用させ、学習のまとめとして単元ごとに新聞を作り、資料活用能力を高めながら理解の定着を図る。また新聞を教室に掲示し、掲示交流を行うことで、意欲を高め、互いの良さを学び合う場とする。
○知識・理解 ・社会科作業帳や白地図など作業を通した活動的な学習を増やし、実感的な知識・理解の定着を図る。 ・分かりやすい板書を通し、学習事項を確認しながらノートにまとめさせることで、学習事項を整理し、知識を定着させる。 ・毎単元5回程度、ICT機器やデジタル教科書を用いることで、関心高めるとともに、確実な理解を図る。特に、実際に見学ができない社会的な事象についても、実物映像資料などを通して理解を深める。

(2) 改善策（手立て）に対する検証

- 単元毎の確認テストにより、正答率 85%を指標として確認する。
- 単元毎にまとめた新聞から、資料の活用能力及び根拠ある思考力、判断力を見取り、定着を確認する。

第5学年 理科

1 結果の分析

(1) 結果の概要

○全体的な状況の説明

◇どの観点でも、平均正答率が全国を大きく

下回っている。4教科の中で、一番評価の低くなっている教科である。

◇正答率度数分布によると正答率が60%に満たない児童が35%いる。個別に定着状況を見取つての支援が必要となる。

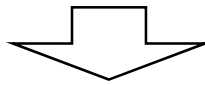
(2) 結果から明らかになった課題

分類	区分	平均正答率 (%)		
		本校	区	全国
評価の観点	自然現象への関心・意欲・態度	61.2	62.8	66.1
	科学的な思考・表現	58.4	61.2	64.0
	観察・実験の技能	67.9	70.9	69.7
	自然現象についての知識・理解	65.0	66.8	68.5

個別の状況 (課題)	解決すべき課題
○生命・地球 「1年間の植物の成長」「自然の中の水」の領域の理解に課題がある。	→「表を読み取り、気温とヘチマの成長の関係を説明」「ふたの内側に水滴がついた理由を説明」する設問で定着が不十分である。
○物質・エネルギー 「電気のはたらき」「物の体積と力」「物の体積と温度」「水のすがた」「物のあたたまり方」「物の体積と温度」の領域の理解に課題がある。	→「検流計が電流の向きと強さを示すことを理解」「光電池でモーターを速く回す方法を説明」「街灯の光電池を南向きに設置する理由の理解」「とじこめた空気や水をおしたときの様子を説明」「温度による体積の変化を利用しているものを指摘」「氷と水蒸気の状態の理解」「水のあたたまり方を指摘」する設問で定着が不十分である。

2 改善策

(1) 具体的な改善策



○自然現象への関心・意欲・態度 ・毎時間の授業で「ふしぎだな」「なぜだろう」という疑問を引き出すことを大切にし、課題を追究する意欲や学習姿勢を育てていく。 ・霧ヶ峰移動教室に向けての事前調べや現地での調べ学習、事後のまとめ学習を通して、自然への関心を高める。 ・霧ヶ峰の移動教室では、実際に天体観測し、星座や天体への興味を高め、季節ごとの星座の移り変わりに関心をもてるようにする。 ・保護者会や学年だより等で家庭への協力もお願いし、日常生活でも観測や観察に積極的に取り組めるようにする。
○科学的な思考・表現 ・実験観察の目的を明確にもたせ、課題解決的な学習をどの単元でも展開する。特に知識の定着と科学的な思考を深めるために、「課題→方法→予想→理由→実験・観察→結果→考察」という学習の流れを毎単元丁寧に行い、予想を検証する楽しさを味わわせる。 ・条件を揃えて行う対照実験・観察を増やす。また、活動後にレポート形式にまとめる活動を増やし、考えや意見を分けてまとめる場面を充実させる。
○観察・実験の技能 ・実験器具などではできるだけ少人数で使えるように準備を行い、児童全員が器具に触れることができるようにする。 ・実験ではグループで行うときも個人で取り組む機会を増やし、正しい操作を身に付ける。 ・実験キットを活用し、一人一人が実験器具の操作を正しく行うことによって、実感を伴った理解ができるようにする。
○知識・理解 ・学習で学んだ自然現象や規則性などが、実際の自然の中で成り立っていることに気付かせ、生活実感を伴った理解ができるようにする。 ・分かりやすい板書を通して、学習事項を確認しながらノートにまとめさせることで、学習事項を整理し、知識を定着させる。 ・毎単元5回程度ICT機器やデジタル教科書を用いることで、関心を高めるとともに、確実な理解を図る。特に、実際に見学や観察ができない事象についても、実物映像資料などを通して理解を深める。

(2) 改善策 (手だて) に対する検証

○単元末に行う確認テストにおいて、正答率85%を指標として確認する。

○グループ実験では友達同士による教え合いを活用しながら、正確な実験操作が身に付いているかを見取り、評価する。

○ノートのまとめ方を評価し、関心・意欲や科学的な思考・表現を個別に見取り、手立てに結びつけていく。

第6学年 国語

分類	区分	平均正答率 (%)		
		本校	都	全国
評価の観点	A 話す・聞く能力	90.3	81.6	79.2
	A 書く能力	84.0	77.2	72.8
	A 読む能力	81.3	79.9	78.5
	A 言語についての知識・理解・技能	80.1	71.2	71.1
	B 読む能力	74.1	70.7	69.3

1 結果の分析

(1) 結果の概要

○全体的な状況の説明

◇評価の観点別分類に着目すると、

「主として知識」を問う問題では

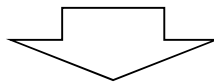
全ての観点において、東京都と全国の平均値を上回っている。

◇最も平均正答率に近いのは、A 問題では「読む能力」であり、都の平均正答率との差は+1.4pt、全国の平均正答率との差は+2.8pt である。また、B 問題の「読む能力」においても、都の平均正答率との差は 3.4pt、全国の平均正答率との差は+4.8pt である。

◇「読む能力」の次に平均正答率に近い観点は、「書く能力」であり、A 問題では都の平均正答率との差は+6.8pt、B 問題では都の平均正答率との差は+2.4pt である。昨年度からはポイントとしては改善しているものの、学年全体として「文章を読む力」と「文章を書く力」の向上を図る必要がある。

(2) 結果から明らかになった課題

個別の状況 (課題)	解決すべき課題
<p>○読む</p> <ul style="list-style-type: none"> 目的に応じて、図や表などの資料を関係付けて読むことや、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫することに課題がある。 物語文における、登場人物に関する読み取りなどに関して、叙述を基にして捉えることに課題がある。 目的や意図に応じて、資料を基に自分の考えを書くことに課題がある。 	<p>→文章を正確に読めない。 比較する観点の理解が不十分。</p> <p>→文や文章の構成の理解が不十分。</p> <p>→資料を適切に読み取ることが不十分。</p>
<p>○書く</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを、適切な表現方法を用いて文章に書くことに課題がある。 目的や意図に応じた文章の書き方に課題がある。 	<p>→自分の考えを適切な単語や文で書くことに関する理解が不十分。</p> <p>→指定された条件下で文章を書くことが不十分。</p>



2 改善策

(1) 具体的な改善策

<p>○読む</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章中に出てくる資料から「何が読み取れるか」を常に意識させる教師の指示や発問を意図的、計画的に数多く行い、読み取ったことや、資料を読んで気付いたことを書き出したり、話し合ったりする場面を各単元で2回以上設定して指導する。 文章中から、「登場人物の考え、特徴」を見付けたり、「場面が変わる際に着目すべき言葉」を見付け出したりする学習活動を、説明文や物語文の単元学習時に毎回実施する。 東京ベーシックドリルとフォローアップシートを活用する。
<p>○書くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> 資料に基づいた「自分の考え」を明確にもたせるために、書く目的、対象、表現方法を明確にして指導を進める。また、他者との交流活動を毎単元で取り入れ、自分の書いた文章の妥当性や客観性をより多く吟味できる機会を増やす。 行事の前後に書く作文指導や、連絡帳にある「10行日記」に取り組みせ、それらの文章についても、目的や意図に応じた文章が適切な表現方法で書けているかを、国語の授業で確かめさせる。

(2) 改善策 (手だて) に対する検証

○理解が不十分な児童に対して、教科書の文章を活用して、読み取りの個別指導を週1回程度実施する。

○単元の学習の終末場面で確認テストにて正答率85%を指標として定着度を図り、文章の読み取りの度合いを検証して、個別指導する。

○毎日連絡帳にある「10行日記」に取り組みせ、書いた文章から目的や意図が読み取れるかを確認する。

第6学年 算数

分類	区分	平均正答率 (%)		
		本校	都	全国
評価の観点	A 数量や図形についての技能	86.9	83.5	82.5
	A 数量や図形についての知識・理解	81.3	77.6	75.4
	B 数学的な考え方	44.6	42.8	40.9
	B 数量や図形についての技能	57.6	58.8	53.3
	B 数量や図形についての知識・理解	70.1	72.6	69.5

1 結果の分析

(1) 結果の概要

○全体的な状況の説明

◇観点別分類に着目すると、「主として知識」を問う設問では「数量や図形についての技能」も、「数量や図形についての知識・理解」も、都と全国の平均正答率をそれぞれ3.4pt、3.7pt 上回っているが、「主として活用」を問う設問ではそれぞれ、1.2pt、1.5pt、都の平均正答率を下回っている。

◇「主として知識」を問う問題では、全ての領域において都や全国の平均正答率を上回っているが、「主として活用」を問う問題においては、「量と測定」の領域が唯一、都の平均正答率を0.6pt 下回っている。また、「数と計算」の領域は、都の平均正答率をわずか0.1pt 上回っている。

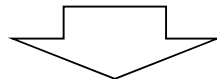
◇観点別に見ると、「主として活用」を問う問題の「数学的な考え方」において、都の平均正答率を1.8pt 全国平均正答率を3.5pt 上回っている。よって、「数学的な考え方」を更に高めながらも、「量と測定」と「数と計算」領域の学力向上を図りたい。

◇昨年度の結果と比較すると、全体的に「数と計算」と「量と測定」領域において課題がある。

(2) 結果から明らかになった課題

個別の状況 (課題)	解決すべき課題
<p>○数と計算</p> <ul style="list-style-type: none"> 乗法や除法の式の意味を解釈することに課題がある。また、演算決定の根拠となる情報の収集や判断に課題がある。 <p>○量と測定</p> <ul style="list-style-type: none"> 単位量当たりの大きさを求めるために必要な情報を的確に見付けることに課題がある。 示された説明を解釈し、用いられている考えを異なる場面に適用して説明することに課題がある。 	<p>→どの数値が何を表しているのかの理解が不十分。</p> <p>→乗法や除法の演算決定の理解が不十分。</p> <p>→もとにする量と比べられる量を文章から見付け出し、適切に数直線図や言葉の式にあてはめることへの理解が不十分。</p> <p>→問われていることに対する自分の考えを、式や図、表、グラフ等で示し、適切に表現するために必要な知識と理解が不十分。</p>

2 改善策



(1) 具体的な改善策

<p>○数と計算</p> <ul style="list-style-type: none"> 朝学習や放課後に、基本的な小数や分数の計算力を定着させるためのプリント教材や東京ベーシックドリル、フォローアップシートに取り組みさせる。 演算決定時に、数直線図を活用する形式の文章問題を、定期的（週2回以上）に授業に取り入れる。
<p>○量と測定</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校生活において、基準量、比較量、割合について考える問題場面を設定し、簡単な整数ですぐに立式したり答えを求めたり、百分率で表したりして、生活場面と算数の学習をつなぐ。 自分の考えを、多様な方法で表現できるように自力解決場面を意図的、計画的に設定し、互いの考えを交流して、児童同士で学び合う学習を繰り返す。

(2) 改善策（手だて）に対する検証

- 教科書の単元末に、プレテストやドリル教材に加え、フォローアップシート、東京ベーシックドリルを活用した反復練習を行い、平均正答率85%以上を目指す。
- 定期的（各単元に1回以上の頻度）に、演算決定の際に数直線図を活用する形式の文章問題を確認テストとして実施する。理解が不十分な児童には、個別指導を行う。
- 「冬休み前の復習（通称“切符”）」を実施する際に、東京ベーシックドリル（到達度95%以上）を導入して、基礎的・基本的な学習内容の定着を図り、不十分な児童へは冬休み中の個別補習を行う。

第6学年 社会

1 結果の分析

分類	区分	平均正答率 (%)		
		本校	区	全国
評価の観点	社会的事象への関心・意欲・態度	74.0	68.6	63.9
	社会的な思考・判断・表現	74.2	69.3	65.0
	観察・資料活用 of 技能	75.5	72.7	69.8
	社会的事象への知識・理解	69.0	68.9	68.2

(1) 結果の概要

○全体的な状況の説明

◇評価の観点別分類に着目すると、どの観点も、区平均・全国平均正答率を上回っている。最も平均正答率に近い観点は「社会的事象への知識・理解」で、区平均正答率との差は+0.1pt、全国平均正答率との差は+0.8ptである。また、最も平均正答率より高い観点は「社会事象への関心・意欲・態度」で、区平均正答率との差は+5.4pt、全国平均正答率との差は+10.1ptである。

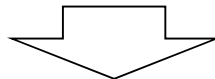
◇「社会的な思考・判断・表現」や「観察・資料活用 of 技能」も、それぞれ区や全国の平均正答率を上回っている。このことから、現在も高い「社会事象への関心・意欲・態度」を更に高めつつ、基礎的基本的知識の定着を、授業と復習とを効果的に組み合わせる指導に取り組むことや、既習の知識を基にして自分で考え表現する力を更に高めるための指導を重点的に行いながら改善を図ることとする。

◇「思考・判断」では平均正答率との差が昨年度より+4.7pt上昇して改善したが、昨年度と同様、「観察・資料活用 of 能力」に課題が見られる。

(2) 結果から明らかになった課題

個別の状況 (課題)	解決すべき課題
○観察・資料活用 of 技能 ・日本の国土について、気候の特徴についての理解を基に、資料を読み取って回答することに関する力に課題がある。 ○社会的事象に関する知識・理解 ・工業生産（主に、工業地域と貿易）と、国土（日本の位置と領土、日本の周辺の海洋名）に関する知識に課題がある。	→複数の資料から必要な情報を取捨選択し、適切な解答や選択肢を選び取る力が不十分である。 →工業や貿易についての覚えるべき基礎的な知識が定着しておらず、また個人差が大きい。

2 改善策



(1) 具体的な改善策

○観察・資料活用 of 技能 ・社会的事象について、その特色や背景を、複数の資料を関連付けて考察したり、表現したりする場面を、単元を通じて設定し、単元のまとめの場面に新聞作りを取り入れて、読み取ったことや重要語句を使って自分の考えやまとめを書かせる。 ・観察、活用する各種資料についての選び方と選ぶポイントを具体的に説明したり、複数の資料を比較する方法を具体的に教えたり、関連する既習事項と結び付けるための掲示物を作成して振り返らせたりする場면을授業に取り入れ、観察したり資料を活用したりする技能を向上させる。
○社会的事象に関する知識・理解 ・獲得すべき基礎的知識をより一層定着させるために、確認クイズという形式でミニテストを単元毎に実施して、知識獲得への興味や関心を高めながら活動に取り組ませる。 ・毎回、授業において、重要箇所の確認時に、用語や位置の記入作業を取り入れたりと、ノートや学習カードに自分でまとめたりする活動を設定して取り組ませることを通して、学習内容の定着を図る。

(2) 改善策 (手だて) に対する検証

○単元末に実施する評価テスト前に、プレテストやミニテストを実施して知識・理解面での定着を確認し、その後の評価テストの平均正答率 85%以上を目指す。また、到達していない児童に対しては、休み時間や放課後等に個別指導を行う。

○知識の定着や、資料の活用 of 技能の向上の度合いを見取るために、フォローアップシートに取り組ませたり、学習内容をノートや新聞にまとめさせたりする。

第6学年 理科

1 結果の分析

分類	区分	平均正答率 (%)		
		本校	区	全国
評価の観点	自然事象への関心・意欲・態度	66.4	64.6	65.5
	科学的な思考・表現	60.8	59.5	60.1
	観察・実験の技能	62.6	62.4	63.6
	自然事象についての知識・理解	73.5	71.7	73.3

(1) 結果の概要

○全体的な状況の説明

◇評価の観点別分類に着目すると、全ての観点で、区の平均正答率を上回ってはいるが、「観察・実験の技能」については、全国平均正答率を 1.0pt 下回っている。また、その他の観点においても、区の平均正答率との差は、それぞれ+1.8pt（「自然事象への関心・意欲・態度」・「自然事象についての知識・理解」）、1.3pt（「科学的な思考・表現」）であり、平均正答率を上回っているとは言えない。

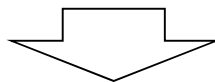
◇どの観点においても、区や全国の平均値との差が見られないため、自然事象に関する観察や実験を取り入れて科学的現象への興味・関心を高めつつ、基礎的・基本的知識の定着を目指す指導を重点的に行いながら改善を図る。

◇「観察・実験の技能」においては、平均正答率以下であった昨年度と比較し、5.3pt 上昇して改善が見られた。

(2) 結果から明らかになった課題

個別の状況（課題）	解決すべき課題
<p>○観察・実験の技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験や観察時に使用する器具に関することや、実験や観察時に重要な手順や操作、またそれ自体の意味についての理解に課題がある。 <p>○科学的な思考・表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・流れる水のはたらきや、電流のはたらき及びふりこのきまりについて、それらの事象について条件を制御して実験・観察したり、その結果や考察を区別してまとめたりすることに課題がある。 	<p>→実験や観察器具の各部の名称や、使用方法についての知識が定着していない。</p> <p>→器具を使用して行う作業手順と、その目的を理解して取り組む習慣が十分に定着していない。</p> <p>→観察・実験時における条件制御の意味と目的を十分に理解していない。</p> <p>→観察や実験の結果と、そこから導き出される考察との違いや、それらの整理の仕方が理解できていない。</p>

2 改善策



(1) 具体的な改善策

<p>○観察・実験の技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各単元における実験や観察で使用する器具類について、その名称や使用方法など知識を獲得する学習場面で、実際に一人一人が操作したり、器具そのものを観察したり、発展的な活用事例を教師が紹介したりして、正しい知識と共に、器具自体への興味や関心を向上させる。 ・観察や実験の結果から出た新たな疑問や課題について、再度観察や実験を行う学習の流れを単元の中に組み込み、器具を正しく使用する時間と場面を確保する。
<p>○科学的な思考・表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・復習プリントやミニテストで各単元の基礎的・基本的知識の定着を確認してから、それらを使って自然事象を説明したり、観察や実験の結果を適切に表現したりする場面を、各単元で設定する。 ・実験の結果と、そこから導き出される考察との違いを、レポート形式のノート指導を中心に指導して、区別して適切に表現できるようにする。

(2) 改善策（手だて）に対する検証

○単元の終わりや学期の終わりの時期に、フォローアップシートに取り組みさせて基礎基本の確実な定着（平均正答率 85%以上）を目指すと共に、実験・観察器具の使用法や名称についてのミニテストを実施し、理解が不十分な児童に対しては休み時間や放課後に個別指導を実施する。

○観察や実験時にレポート形式のノート指導を実施し、結果と考察を区別して表現できたかを評価する。